比治山教育の可能性

寒山詩に「源ハ窮マレドモ水ハ窮マラズ」の一句のあることを知ったのは、故唐木順三氏の或るエッセイの中においてであった。もう二十年余りも前のことである。それ以来、何かの時、この詩句が心に蘇ってくる。その意味は、水源は探究され、解明されたとしても、水は相変わらず目に見えぬ地底から、こんこんと湧き出て尽きない、というのである。さきに「何かの時」といったが、この詩句が思い出されるのは、きまって私の思考の流れが、「無限」とか「永遠」とかの観念に引き寄せられる瞬間である。

国信玉三先生の示された比治山学園の教育精神について考える時も、やはりこの詩句を想起する。その教育精神が最も簡明に記述された一文を次にかかげる。便宜上、比治山短大の学生募集要項の初頭にあるものによる。

われわれの生命を久遠の古から今日まで、連綿として生々育成してきた限りない大きな慈悲

を、手近に教示するものが親である。

その親心にこたえて、悠久不滅の生命の理想に向かって精進することが、自然法であり、善であり、孝道である。

本学園は、学生生徒がそれぞれに親心に帰り、その期待にこたえて精進することを教育の目標としている。

ここに示された教育目標が、国信先生の深遠な生命哲学から生まれたものであることは、右の短文を一読すれば明白である。

私が、国信玉三学長の恩命により、比治山女子短期大学教授として着任したのは、開学の翌年の昭和四十二年四月であった。短大は、比治山女子中学校・同高等学校の父兄の方々の、同じ教育精神のもとに、中・高・大と一貫した教育が受けられるように、との切なる要望により、中学校・高等学校の校長としての国信先生が開設を決意されたものであることは、かねがね聞いていたので、以前から国信先生の教育精神に深い共鳴をおぼえていた私は、ためらうことなく、喜んで短大教員の仲間に入れていただいたのであった。私は平素から、もしその機会があれば、女子教育に晩年をささげたいと思っていたこともあって、この恩命によって、はからずも、得がたい幸運を恵まれたことになる。

その内に、国信先生は、御健康の都合もあって、学長を辞任されることになり、私にその後を

受けて第二代学長となるようにとのお言葉を頂戴した。不敏にしてその任に堪える者でないことは十分承知しながら、昭和五十六年四月学長を拝命する仕儀となった。国信先生には、改めて学園長として、より高い立場から学園の教育を指導していただくことになったのは、何よりのことであった。

私は、国信教育の継承と発展に、及ばずながら献身することを内心に堅く誓った。学長就任の翌年、新たに本学に「女文化研究センター」という研究施設を創設した。これは、十余年前から私が持ちつづけている「男と女」というテーマを、女子教育を担当する本学の研究テーマとして発展させたいという私の発願に、同僚諸氏の賛成を得た結果である。この研究施設は、文化創造主体としての女性にそなわる、男性とは異なる独自の能力とその発現を、歴史的・理論的に探究することを目的とするもので、その発想の根拠が、もとより国信先生の教育思想にあることはいうまでもない。そして、将来母親となる女子学生の教育の指標を、その探究によって得ようとするものである。その研究成果の一端は本年三月「年報」第一号に公表して、大方の批判を乞うた次第である。なお、ここに一つ付け加えたいことがある。去る十月二十三、四、五の三日間にわたり、朝日新聞社主催の国際シンポジウム「子どもたちに何を伝えるか——二十一世紀へのメッセージ」が、内外の最高知性の参加を得て東京で開かれた。私はその詳報の記事を、終始吸い込まれるように心読した。最終日の「二十一世紀への伝言」という第五議題で基調報告に立った山

崎正和氏（劇作家・大阪大学教授）は、二十世紀最大の事件の一つは、核兵器によって人類が人類と文明の全体を絶滅させる能力を持ったことだ、とし、われわれは人類の滅亡に反対する論理を組み立てられるだけの倫理思想を持っていない、と指摘した。このまま進むとして、予想される可能性のいくつかを挙げ、その最後に、儒教に見られるような美学的な行動規範としての儀礼と作法の文化が実現すれば、一つの贈り物を残すことになろう、と結び、他の討議参加者もこれに賛意を表した。これは、本学が、学生の日常生活において重視している「あいさつ」の意義を、宇宙的視野において証明してくれたものとして、新たに勇気と自信を与えられた思いである。

（昭和五九・一二）